

talk! talk! talk! 旅人・たかのてるこさん



旅人

たかのてるこさん

バッグひとつで流浪の旅をすること28カ国。自らを旅人、と語るたかのてるこさんは学生時代にやみつきになったというひとり旅を今も続けている。

「人を笑わせるのが好き」というたかのさんはその愛すべきキャラクターで、言葉も通じない現地の人々と仲良くなってしまおうという。そして訪れた国の文化を体当たりで体験し、心の底から楽しんでる。

そんな彼女の旅の必需品が“大好き”なカメラだ。旅で出会った人々を撮るというカメラについてたっぷりとお話いただいた。

プロフィール

1971年、大阪府豊中市生まれ。日本大学芸術学部在学中に海外へのひとり旅に目覚める。1993年、東映に入社。1998年、インド旅行をビデオで撮影し、自ら編集するという、本人出演、演出の旅ドキュメンタリーをテレビ局に持ち込み、TBS系で『恋する旅人～さすらいOL』として放送され、話題になる。2000年11月、紀行エッセイ『ガンジス河でバタフライ』（幻冬舎）を出版。2002年3月には第2弾紀行エッセイ『モロッコで断食（ラマダーン）』（上下巻・幻冬舎）を出版。その4月には旅ドキュメンタリー第2弾番組『銀座OL世界をゆく！モロッコで断食』がフジテレビ系にて放送。そして2003年3月、ラオスでの体験を綴った『モンキームーンの輝く夜に』（幻冬舎）を出版。4月、旅ドキュメンタリー番組『銀座OL世界をゆく！2 恋するラオス』がフジテレビ系にて放送され、また話題を呼んだ。

現在ひとり旅で訪れた国は28カ国。銀座でOLを続けながら有給休暇で世界の旅を続けている。「現地の人とグッと仲良くなる」をモットーに世界制覇を目指す。

行く先も流れにまかせるひとり旅 「現地の人々と触れ合いが楽しい」

たかのさんはOLとして働きながら、休みを取ってひとり旅をしていらっしやるそうですね。そうですね。大学のときに香港、シンガポールに初めてひとりで行って、それ以来、働き出してからも行っています。10年ぐらいかけて、28カ国に行きました。仕事で行った国を含めるともう少しありますが、純粋にひとは28カ国です。

イスラム圏の国やアジア諸国が多いそうですね。

最終的には行ったことのない国、全部行きたいんですよ。欧米やリゾート地は老後でもいいんです。若くてガッツのあるうちに、ガッツのいりそうな国に行っておこうと思っていました。女性ひとりで、しかも、行く国も思いついたままにということですが。

行ったことのない国であれば、本当にどこでもいいんですよ。休みが決まったら、そのまま旅行代理店に直行して、一番安い飛行機のチケットが手に入る国に行く、という感じですね。

実は、ひとりで行くのは今でも怖いですよ。28カ国も行っていると、さぞかし旅慣れているんだらうと思われるかもしれませんが、今でも現地の空港に着いたらすごく緊張します。現地で会ったバックパッカーの人に、「旅は初めてですか？」ってよく聞かれますから、それほどビクビクしているんでしょうね。

それでもひとり旅にこだわるのはなぜですか？

ひとりだと怖いから慎重になるんですね。現地で出会った方のお宅に泊めさせてもらったりしていますから、そんな簡単についていくのは危ないと思われるかもしれませんが、私なりに、一対一でこの人は安全かなってちゃんと見ているんです。ふたりだと、「大丈夫かな？」なんて言い合っているうちに、ふたりだから大丈夫じゃない？っていう雰囲気になるかもしれませんよね。私は、そっちの方が危ないんじゃない？って思うんです。

訪れた先の国では、現地の方と仲良くなって家に泊めてもらったり、家庭料理をごちそうになったり、あるいは断食を一緒にしてみたり……。積極的に現地の方と触れ合って、その国の文化をそのまま体験されていますね。

そうですね。たとえばガイドブックに載っているような宿には、絶対に行かないですね。普通に観光をしていると、そのホテルの人だったり、お土産屋さんの人だったりガイドだったり、そういう“観光業”に携わっている人にしか接する機会がないじゃないですか。そういう人は、その国のごく表面の人たちで、その国で普通に生活している人とは違うんです。観光業の人だけにタッチして、この国はあーだった、こうだったって言う人もいますが、私はただ道を聞くだけでも、現地の人と触れ合いたいんです。その方が楽しいですね。

現地の方々と交流を持つことで、その国の本質に触れているんでしょうね。



恥ずかしそうにほほえむ女の子たち。口に手をあてる仕種はアジア独特のもの。(フィリピン)



雑貨屋さんの看板娘。(ラオス)

旅の必需品はカメラ 被写体は現地で出会った人々

これまでに体験された旅を、本にまとめたり、ドキュメンタリー番組として放送されたりしていらっしやいますね。

ええ。まあ、本は出版社の人に書いてくださいって言われて書いたんですけど（笑）。だから溢れ出る欲求を本にしたための！みたいなものではないんですけど……書いてるうちに楽しくなってきました。自分のウェブページがあるんですけど、「また書いてください」っていうメッセージをいただくので、また書いた方がいいのかなあって思ったり。でも、本当は文章より写真をメインにした本にしたいと思っていましたよ。

本の中には、たかのさんの撮影された写真が掲載されていますね。旅に行くときは必ず撮影されるのですか？

もう、カメラは絶対に持っていますね。荷物を減らしてでも、1本でも多くフィルムを持って行きたいですから。いつも、カメラ道具以外にあまり荷物を持っていかないというぐらいですよ。

カメラがあると、どこの国に行っても飽きないんです。たとえばラオスはなんにもないような所なんですけど、人がいい感じなんです。被写体がものすごくいいから撮っていて飽きない。

そういえば、本を拝見すると、風景よりも現地の方々、人物写真が多いように思いますが。

風景はほとんど撮らないです。旅から帰ってきて後で思い出すのは「あそこの遺跡がよかったな」ということよりも、「道教えてくれたおばちゃん優しかったな」とか「あのお土産屋のおっちゃんおもしろかったな」といったことなんです。人との触れ合いのほうが印象が強いから、写真も出会った人を撮りたいんです。



左から『モンキームーンの輝く夜に』
(幻冬舎/本体1,300円+税) / 『ガンジス河でバタフライ』
(幻冬舎文庫/本体648円)
香港、シンガポール、インドの旅を瑞々しい感性で書いた『ガンジス河〜』。初めての旅で巻き起こる、小心者ゆえのハチャメチャな行動に笑い所も満載です。今年3月に発売された最新作『モンキー〜』では、「最愛の人と運命の出会いを果たした!?”とか。ひとり旅28カ国目のラオスを書いた笑い涙の恋愛&紀行エッセイです。

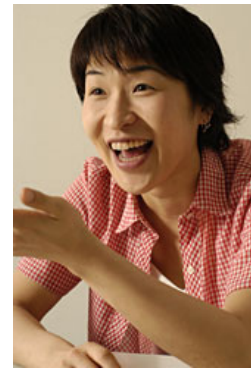
旅で覚えたカメラは 旅に出るときのみ使用!?

そもそも、カメラを始められたのはいつ頃からですか？

旅始めてからです。初めて行った香港、シンガポールに持っていったレンズ付きフィルムでシャッターを押したのが、人生で初めてのカメラ体験ですよ。それまでは、友達に撮ってと言われても、「私はそういうの、わからへんから」ってかたくなに断っていたぐらい、まったくさわったことがありませんでした。

初めの旅では写真を撮ると意識は、まったくなかったんですか？

最初はなかったですね。カメラを持っていても、あまり撮ろうとは思いませんでした。でも次にいったインドで人を撮ったんです。そうしたらみんな顔してるんですよ。人がいいもんだから写真が絵になるんですよ。そう思って周りを見たら、大きなカメラを持ってパシャパシャ撮っている人がいるんです。それを見たら、私もあいうカメラで撮りたい、写真がうまくなりたいて思ったんですよ。



「オレは5分間目を開けていられるぞ!」と言って、実際にやってくれているところを撮影。(フィリピン)

それから旅にカメラは必需品になったんですね。

でも、上達しないんです。旅に出たとき、1年に1回ぐらいしか撮らないから(笑)。

普段は撮影されないのですか？

本当は会社に行く途中とか、いつもカメラを持ち歩いて撮りたいんですけど、そうすると会社にたどり着かないんですよ。街を歩いていると、「これも撮りたい、あれも撮りたい」って思うものがたくさんあるんですよ。でも、いちいち撮っている時間がないんですよ。「撮りたいのに時間がないし、でも撮りたいし、ああ、もう!」ってなってしまうので、普段は撮らないようにしています。撮りたくなるからあんまり周りを見ないようにもしています。せつないですよ……。

では、普段撮れないうつぶんを旅に込めて？

ええ、もう爆発的に撮ってますね。でも、それだけでもどんどんうまくなってるかな、なんて。こんな私でも撮れるんだから、カメラはハードじゃなくて、ハートで撮るものだとつくづく思いましたね(笑)。

この世でいちばん楽しいのは レンズ越しに自分を見ている目を撮ること

どれを見ても、見ていて元気が出るような本当に素晴らしい表情の写真ばかりですね。

本当ですか! ありがとうございます、うれしいです。私も自分の写真がすごく好きなんです(笑)。本の文章や、ドキュメンタリーの番組を褒められるよりも、写真を褒められるのが実はいちばんうれしいです。

何がこの世でいちばん楽しい瞬間かって写真を撮っているときだと思えますよ。旅先で写真を撮っていると、「楽しいー!」って気分が昇天しそうになりますよ(笑)。うわ! もう考えるだけで楽しい!!

(笑) どうしてそんなに楽しくなるのでしょうか？

私のようなこの馬の骨ともわからないような人に、心を開いてくれて、いい笑顔を見せてくれる。それをパシャッと撮る瞬間に「ビビッ」ってくるんですよ。その笑顔のピュアさにも心打たれるんですよ。私、世界中の笑顔をお持ち帰ることが夢なんです。

笑顔ですか？

みんないつも笑いたいと思っていると思うんですよ。楽しく過ごしたいとか。怒りながら過ごしたいという人はいないのではないのでしょうか。

この“笑顔”を撮るためのコツはなんですか？

その人を笑わせることじゃないでしょうか。別に、写真を撮るために笑わせるのではなくて、いつも人を笑わせるのが好きなんです。まずは話しかけて笑わせて、仲良くなってから撮る。たとえばお土産を売りつけてくるおばちゃんがいいたら、「あんまりしつこいと写真とっちゃうぞー」っていうジェスチャーをしたりして。

言葉はやはり通じないのですか？



子どもたちにとって、川が一番の遊び場! (ラオス)

そうですね、英語も得意ではないですし、少数民族の人もいますからね。でも言葉は通じなくても、カメラを見せて「あなたが、とっても素晴らしいから、だから写真撮ってもいい？」ってジェスチャーをしてから撮ります。それで問題なく、通じますよ。たとえば撮ってくれと向こうから言うこともありますし、カメラを渡して「こうやって、ここをぎゅーっと押すんだよ」って教えてあげて撮ってもらったりすることもあります。カメラがひとつあると、すごくコミュニケーションがとりやすいんですよ。

カメラのおかげで仲良くなれる。

ええ。だから私は、望遠で遠くから人を撮ったりすることはありません。絶対に本人に断ってから撮ります。なによりも、レンズの向こうから私を見てくれる目が撮りたいんです。

その気持ちが伝わって、あのような笑顔の写真になるのでしょうかね。

でも、私は日本でめったに撮らないんですけど、友だちを撮ったことがあるんです。ファインダーをのぞいたときって、片目をつぶるから自然と自分の口角が上に“にー”って持ちあがるじゃないですか。それが笑顔みたいでいいなあと思っていたんですけど、友だちを撮ったときに「あなたの顔笑うで！」って言われて。

自分ではわからなかったんですけど、私すごく大口を開けて“わひー”って（笑）すごい顔しているらしいんです。もしかしたら、みんなそれを見て笑っているのかもしれないですね（笑）。



日傘をさす女の子。日差しが強いラオスでは、女の子は日傘をさすのが定番！（ラオス）

訪れた国が身近に感じられることが 旅のいちばんの魅力

旅のいちばんの魅力はどこですか？

旅をしているときもちろん楽しいですけど、1回その国に行くことと帰ってきてからその国が身近に感じられるのです。前だったらニュースを見ていて事件や事故があっても、知らない国、よその国って思ってたところが他人ごとでしたけど、「え、モロッコで地震？ ラオスで洪水？ どうしたんだらう、大丈夫かな」って人ごとではなくなってしまふ。それは日本に帰ってからも、すごくいいなって思うところです。

全世界、人ごとではいられない気持ちになりたい。

そう、いつも心のなかで、「ああ」って心配したい。それで、自分になにかできるわけではないんですけど、大丈夫かなって思える。そして、向こうも私という人間を知って、遠い空から「日本は大丈夫かな、てるこは元気かな」って心配してくれて、思ってくれる。そういう思い合う気持ちが広がれば、世界平和につながるんじゃないかな。お互いがいつまでも、よその国のことなんて知らないって言ってたら、分かり合える日は絶対に来ないと思います。

今でも旅で出会った方と交流はあるのですか？

ありますよ。見て、すごくいい写真だなんて思ったものは送ってあげていますから。泊まったお家だと、かなりの枚数を撮りますから、アルバムにして送ります。それで、向こうからも手紙をもらって、やり取りしています。だから、焼き増し貧乏なんです。現地で使ったお金が3万円ぐらいいなのに、焼き増しではその何倍もかかったりして（笑）。

今後このひとり旅を続けて行くのですか？

ええ、全世界を旅するのが夢ですからね。会社勤めをしていますし、この先どうなるのかわからないというのが正直なところですけど、ま、夢は夢ですから。

出せるのならいつか写真集を出したいですね。自分で、笑顔の写真を集めた『世界の笑顔に恋してる』っていう写真集を作ったんですけど、そういうのにちょっと自分の言葉を添えたりして、1000円ぐらいのもので。そんなたいそうなものじゃなくていいんですよ。

本当に、写真が好きなんです。

ねえ。まさかこんなに好きになるとは。でも、やっぱり写真はいいですねえ。去年の10月に旅に出て以来カメラを持っていないですから、今日自分の写真を見ていたら、またすごく撮りたくなってきました。



水汲みのお手伝いをする少女。うつむきながらはにかむ姿がとても愛らしい。（モロッコ）



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.